

などの器材の準備が整然としかもきびきびと行われている。

歩兵突撃隊古川小隊（三〇人）を先頭に、工兵肉薄攻撃隊真砂小隊（三〇人）、柴田中隊長及び指揮班、続いて歩兵第二小隊、第三小隊である。大隊長鈴木竹夫大尉の訓示と激励を受ける。

折から冷雨蕭々として、薄暮を過ぎた七星巖は黒く横たわり不気味に見える。七星巖の西南側の月牙山は歩兵第二三五連隊が攻め、既に交戦を開始したため、七星巖も防戦を開始し、至近弾、迫撃砲弾が集中し始める。これによって「突進合図」の信号弾が上がり「擲弾筒前へ」と第一中隊の決死隊が工兵支援により突撃にかかった。

この七星巖の攻撃は、この夜から八日朝まで五晩六日の血戦苦闘であった。鈴木大隊は七日朝には七星巖の頂上を攻略し、次いでB洞窟の入口を封鎖して攻撃を続行、夕刻には七星巖の高地を完全に奪取した。」

師団長宮川中將は、七星巖攻略の進展に伴い、逐次

桂江渡河のための諸準備を進めることとなる。

## 中支 槍兵団の戦闘

山口県 山本 哲 男

私は昭和十八年二月一日、現役兵として山口歩兵四十二連隊補充隊に入隊しました。入営時の私の家庭は、父は既に亡くなっており、母と二人で一町歩の水田農家でしたが、叔父が満州新京で駅前ホテルを経営していて、この叔父の勧めで、満鉄用地の払い下げを受け、満人・朝鮮人を雇い、柳井の水田と共に満州で農場経営を始め、内地と満州を往復しつつ農業を経営していました。

私達は入営と同時に中支槍部隊要員として現地教育を受けることとなり、二月十三日、山口を出発しました。山口を出発してからどこから連絡があったのか、母が小郡駅に酒を持って面会にきてくれておりました。母と二人の生活でしたので心の残る訣別でした。

下関、釜山、朝鮮を通過、山海関で初めて私達は南京に向かうことを知らされました。

南京までは二、三日を要しましたが、途中通過駅で食事等の支給手配は充分で量も多く、内地は食料事情が逼迫した時節でしたから兵隊はよいなあと車内は賑わいました。

南京に着いた時の第一印象は、南京は内地と同じ気候だなと感じました。駅前広場で今までの車内生活と異なり久しぶりに寛いだ気持ちで昼食をとりました。再び貨物列車に乗車、一昼夜ぐらいを要して杭州に着きました。

私達は槍部隊（独立混成旅団）の独立歩兵第一〇五大隊で第二中隊は杭州より自動車で所要時間約三時間離れた余杭を警備していました。

私達初年兵はこの部隊初めての現役兵で大歓迎を受けました。翌日より班長、初年兵係による猛訓練が始まりました。毎晩、初年兵と背囊は叩けば叩く程良くなると言って叩かれて、昼間の訓練、夜の内務と昼夜一寸の油断も許されない猛鍛錬が続きました。

初年兵教育の一カ月くらい経過した夜に敵襲がありました。古年兵は直ちに応戦に飛び出しましたが初年兵は班長と共に残留することになりました。敵は頑強に反撃し翌朝にまで戦闘が継続しました。班長が「山本、お前は軽機手要員だから戦闘を見せてやる」と戦況のよく見える場所へ連れて出て、眼鏡を私に渡して「今こちらが撃っているが弾着で見えるか」と言われました。眼鏡に写し出される敵正規兵の姿です。そしてその付近に砂煙がパッパッと飛び散っているのが友軍の射撃です。生まれて初めての実戦の風景です。そのうち私たちの付近にパッパッと土煙が上がり始めました。とたん班長から「山本伏せろ」と鋭く命ぜられました。私達初年兵はこうした現地の日常的教育訓練のお陰で日一日と強く逞しい兵として育ちつつあるのです。

一期の検閲は三カ月後、山口部隊長の検閲のもとに行われ「優秀」と格付けられ名誉を施しました。

一期の検閲がすんで、広徳作戦に参加しました。私

は中隊長の当番兵として出陣しました。自分の携行品の他に、中隊長の携帯品のほとんどを担いでの行軍です。二日くらいは無事な行軍が続ぎ、今日は故郷柳井の新庄の秋祭だなどと頭に描いて歩き続けました。が、夕刻敵機が上空を旋回し、上空から去って間もなく両側の高地から敵の急襲射撃を受けました。不意な射撃を受けたので部隊から相当な負傷者を出しました。

それを契機に毎日戦闘が続きました。遂に敵の防衛線を突破し追撃戦に移りました。友軍の装備が優れていて野砲も撃つし歩兵砲も撃ち、歩兵部隊は山口第四十二連隊の精鋭部隊。広徳の城門を落とすまでひたむきに進撃を続けました。

広徳が陥落した後、私達は旧の駐屯地余杭へ帰りました。帰った時あの頑丈な軍靴がすっかり擦り切れ破損してしまいました。

それからは警備地を何度も転々と変わりました。二月になって警備地の大移動が行われ、南京まで汽車で移動し、さらに揚子江を船で安慶へと移動しまし

た。その時B 29を初めて見ました。飛行機雲を曳いて飛ぶのも初めて見ました。支那の民衆がこの飛行機雲を見てワイワイ騒ぐので「あれは日本軍の高射砲弾が命中し油が流れている、やがて墜落するだろう」と説明しましたが、彼等は納得しませんでした。今考えて見ると随分滑稽な話ですが、私達は飛行機雲を初めて見たのでした。

私達は安慶の奥地へ分哨警備に就きました。前警備隊が敵襲でやられた地域であり、私達も僅か六人の兵力でしたので充分警戒を怠らず、一度も敵襲を受けずに無事任務を果たすことが出来ました。

昭和十九年三月下旬、安慶から嘉興に向かって揚子江を下ることになりました。私達は小舟艇に分乗して航行しましたが、大きな船で航行していた砲兵らしい部隊が敵機の爆撃を受け撃沈されるのを目撃しました。私達はこの爆撃の際、江岸の木陰等に隠蔽し、難を避けて航行を続けました。

当時の揚子江の運航は既に敵機の制圧下に入ってい

ました。

昭和十九年六月、部隊は衢州作戦に参加して進撃を開始しました。私達の中隊が最前線となり進撃中、向こうの高地に藎を着た人間がゴロゴロするほど大勢いるのを発見し、直ちに小隊長に報告しました。小隊長は「敵が多いから今撃つな」と射撃を制され、さらに「軽機関銃のみ残って射撃、他の者は後方までさがれ、軽機は残弾を撃ち終わったらさがって来い」と命ぜられ、私は残って残弾三〇発を撃ち終わり引き返そうと後ろを見たら五人くらいの敵兵が近づいているのを発見しました。大変と走り出した途端足元の窪地につまずいて転倒し、その瞬間、迫撃砲弾が爆発しました。背に異常を感じましたが夢中で立ち上がり、さらに走り小隊の位置までさがることが出来ました。その時の破片が三つか四つ今でも背中に残っています。私達の中隊は随分突出していたらしく、本隊に合流するまで九二日を要しました。

私達の部隊は杭州湾に米軍の上陸を想定、陣地構築

を始め、訓練も始めました。私は兵器係だったので敵戦車攻撃用の破甲爆薬を造って敵の上陸に備えました。

八月になって満州転進の軍命令が来ました。さらに十五日に終戦を迎えましたが、部隊は軍命令に従って対ソ戦を覚悟して兵器弾薬を貨物列車に積んで北進を続けました。貨物列車の屋上に軽機を配備して警戒して前進しました。無蓋車に敵が手榴弾を放り込んだりしました。列車は蚌埠付近で列車妨害の壕に落ちて停車、工兵隊の努力で半日くらいで復旧し、発車して前進を続け蚌埠に到着しました。

そこで淮南炭坑の邦人救出等不慮の事件が発生したりしました。そこで部隊は武装解除を受けました。私は兵器係でしたので兵器引き渡しの役を受け、部隊の兵器を中国側に引き渡しましたが、軍刀の中に名刀が交じっていたのを今でも残念に思います。

復員後満州の農場はやむを得ませんでした。郷里に残した田畑は母が守り通してくれたお陰で農業に復

帰することが出来ました。

農家として一生懸命努力したため勲六等の叙勲を受け、農業委員、農協理事等を経て今日に至っていません。

先年サラリーマンの長男が「父さんは年をとったから今後田畑は自分が引き受ける」と申し出がありましたので、新しく農機具一切を購入して与え、世代交代を終わりました。

## 鉄道警備 異常なし

大阪府 山本幸一

出征の時の私の家庭は、父母とも健在で、実兄二人と義弟三人で農業を営んでおりました。母は義理の母です。私は家業の手伝いをしていましたが、そのうち大阪に奉公に出て、昭和十七年一月に徴用になり、陸軍造幣局で働いていました。昭和十九年の検査まで約二年半の間です。独身寮もあり、そこからの通いでし

た。

昭和十九年十一月十日現役兵として、歩兵第二二連隊補充隊（通称「鳥取第四十七部隊」）に入隊、直ちに中国の独立歩兵第二三一大隊に転属になり現地で終戦を迎えました。

その間、初年兵教育―鉄道警備―野戦自動車廠勤務―終戦―復員と南方諸島やビルマ戦線に比較すると平穩な勤務でしたが、それなりの苦勞がありました。

昭和十九年十一月十九日、独立歩兵第二三一大隊に転属。

博多―釜山―新義州―安東―山海関を通過し、十一月二十二日に南京に下車。二十八日南京出発、十二月一日漢口下車。十二月四日漢口出発、五日応山下車。

十二月十二日に独立歩兵第二三一大隊第二中隊に編入され、應山地区警備の任に就きました。

昭和二十年の正月を初めて外地で迎えた時は日本のこと、村のことが思い出され、異郷に居ることを痛切に感じました。また、その寒いこと、朔風吹き荒れるのを身をもって感じました。戦時下で着るものがない